出雲流庭園と「赤」

庭園文化研究分科会　林　秀樹

1 出雲流庭園の象徴色は「赤と緑」

出雲流庭園とは何かと問われると、大きな飛石や石燈籠を据えた「白砂青松・枯山水の庭」であると話すことが多い。さらには、縁起の良い木を植え、「ナギは凪」などの語呂合わせで無病息災を願い祈っているとか、婚礼や祭、葬儀などの「ハレの舞台」となることなどと解説している。

これまでは庭のデザインや石燈籠・庭木の種類など、出雲流庭園の魅力や作庭流儀について調査研究を進めてきた。

ここでは、今まで取り上げたことがない「庭の色彩」に着目して考察してみる。

モチノキの赤い実
常磐木の庭に赤が映える

出雲流庭園のシンボルカラーは赤色と緑色であると思っている。

緑色は言うまでも無く、庭を取り囲む常緑樹の庭木である。出雲流庭園では、鮮やかな紅葉や美しく咲く花を嫌い、一年中変わらず緑の葉を持つ常緑木を植えた。永久不変に家が栄えることを願い、冬も葉を落とさない常磐木の庭としたのである。加えて、緑色は春から夏、成長をあらわす象徴色であり、五穀豊穣を願う農民の大切な色となっている。

赤色は、あまねく世界を照らす太陽の象徴色であり、すべてを焼き尽くす火の色でもある。邪気を祓い長寿をもたらす神聖な色と思っている。

縁起の良い色である赤色は、日常の生活にも取り込まれている。出雲地方では、赤飯を「あずきご飯」とは呼ぶことはない。他の炊き込みご飯は、具材によって「豆ご飯」、「竹の子ご飯」など呼ぶのと異なり、赤色を強調し「赤飯」と呼ぶのである。

人々は子どもたちの健やかな成長や無病息災を願い、節句や誕生日には赤飯を食べた。七夕の短冊や鯉のぼりの吹き流しに赤色があるのも同じである。過去の風習とはなったが、６０才の還暦の祝いでは、赤いちゃんちゃんこを着て、赤飯を食べ長寿を願った。赤色は、お祝いには不可欠な色であった。

出雲流庭園の潜む赤色はなにかと尋ねられると、赤砂と赤い実であると答えている。縁起の良い赤色は地表の敷き砂と庭木の赤い実なのである。

出雲流庭園は、季節感の少ない常磐木に囲まれたアースカラーの庭である。しかし、秋が深まる頃、庭のあちこちに赤色が出現する。目立たない黄緑色の小さな花を咲かせていたモチノキ、タラヨウ、モッコクなどの常緑樹が、秋が深まる頃に鈴なりに赤い実をつける。花は咲く日は短いのと対照的に赤い実は立春の頃まで枝に残る。赤色を大切にする、出雲流庭園の真骨頂だと思っている。

出雲では、庭木の定番であるモミジやウメなど花や紅葉が美しい木を植えることは御法度であった。根締めに植えるサツキなどは来年の花芽がついた夏に剪定した。

寒い山陰の冬、木漏れ日のさす落葉樹の庭と違い、常緑樹の庭は暗い。まさに「陰」の世界である。赤い実のなる木を植え厄払い、魔除けとし、病魔や悪霊から家族や家を守ろうとしたのではないかと考えている。

庭に赤い砂を敷くことは出雲独特の庭づくりの仕様、他の地域の庭では見ることはない。かつては庭に「赤砂」を敷くことは出雲の人々の憧れであった。寺院、酒の醸造元、豪農、神社の宮司宅など裕福な家では、競って赤い砂を庭に敷きつめた。雨上がり日に照らされた赤色の庭は、神聖な雰囲気が満ち、見事だったと思っている。

赤砂の庭　雨上がり、日に照らされ、赤が際立つ
安来市 鈴本家庭園

しかし、赤砂の産地、安来市の田頼川での砂利採取が禁止されたこともあって、供給が途絶え、今ではほとんど庭から赤砂は消えているのである。

赤と緑は、色を体系化してみせる「色相環」では正反対の色、補色である。赤と緑は明度もほとんど同じで、補色対比が強いことから、それぞれの色が強調され、鮮やかな色合いになることが知られている。寺院で見かける五色幕は、白、赤、緑、黄色などに染められ、法要などの「ハレの舞台」を演出する。五色幕の緑色と赤色は、補色対比の効果もあり特に鮮やかな色合いである。

出雲流庭園の赤色の庭木の実や赤い砂は、常磐木の緑との補色対比の効果もあり、鮮やかな赤色を演出すると思っている。

本稿では、この赤砂に焦点を当て、出雲流庭園の魅力と謎を解き明かそうと考えている。

2 出雲流庭園の赤砂

出雲流庭園の赤砂は、安来市荒島町の飯梨川水系田頼川で採取されていた。今は採取禁止であり、幻の赤砂となっている。

出雲の庭師たちは、赤砂が庭からなくなる状況を目の当たりにし、他の場所から赤砂は入手できないか手を尽くした。残念なことに、これまでのところ同じ品質の赤砂は見つかっていない。山口市にあるとの情報があり調べたが、いわゆる錆砂利であった。赤茶けた荒砂は、まさに鉄の赤錆の色、明るさが際立つ赤砂の色ではなかった。

安来市荒島町の墓地
田頼川の赤砂で墓を清める

同じ花崗岩地帯であっても斐伊川や飯梨川でも赤砂を見ることはない。島根県内では田頼川だけであると思っている。

荒島町では古くからこの赤砂を庭に敷き、墓地の敷き砂としている。赤砂で家や墓を清め、邪気を防ぐ魔除けであったと考えている。田頼川での赤砂の採取は禁止されたが、大

雨が降り洪水となると、側溝や用水路には田頼川から赤砂が流れ込む。今でも地域の人々は、側溝等から赤砂をさらい集め、季節ごとに墓まわりを清めている。

赤砂は、田頼川流域でしか取ることができない希少な砂、その砂を遠く離れた大社町や斐川町まで運び、庭に敷いた赤砂への執着心は、大きな謎である。

出雲市斐川町で古老に赤砂のことを尋ねると

「昔はこの辺の大きな庭は、赤い砂でうめつくされておった。」

「貴重な砂であり松江藩の特産品として御留砂になったと聞いた。」

「山陰本線が開通し、屋根のない無蓋車で京都など各地に運んだ。」

などと話す。

左:出雲市大社町 手錢家庭園　　右：倉吉市 小川家庭園

・今も残る数少ない赤砂の庭　いずれも日本酒の醸造元の庭
・雑菌の侵入を防ぎ清浄を第一とする蔵元は、赤砂を庭に敷き詰め邪気を防いだか

この赤砂は、出雲流庭園以外では京都での需要が高かった。1912 年(大正元年)、山陰本線が京都駅まで開通すると、屋根のない無蓋車に赤砂を積み込み運んだという。どこに使ったのだろうか。京都の造園会社に尋ねたが知らないとの回答、今となっては謎である。

赤砂は鳥取県倉吉市でも珍重された。酒の醸造元であった小川家には今でも赤砂の庭が大切に守られている。唯一島根県外に残されている貴重な庭である。この赤砂の入手方法を尋ねたところ、「伝票が残っている、貨物列車で運んだらしい。」との返事である。京都へ貨物列車で運んだことについても伝票があれば送り先がわかる。解明に向けて、また一つ宿題が残った。

3 作庭家重森三玲「赤砂」へのこだわり

出雲流庭園の赤砂の存在を世に知らしめたのは、重森三玲である。

昭和の大作庭家「重森三玲」は、全国 350 庭園を実測し日本庭園史図鑑にまとめ上げた庭園研究家でもあった。出雲地方の庭園を調査したとき、これまでに見たことのない赤砂が敷き詰められた庭を見て、重森三玲は、衝撃を受けたのではないだろう。「飯梨川の御留砂・赤砂」と紹介し、詳しく述べている。

一般的な庭の敷砂は、白砂である。例外的に「侘び寂び」を求めて茶庭などでは「錆砂利」を敷くことがある。出雲の赤砂と似かよった赤茶けた砂である。

言うまでもなく重森三玲は、この錆砂利を熟知しており、「赤砂」と比較するなど詳しく観察したに違いない。そこで、赤砂が錆砂利と異なると判断し、著作では「錆砂

利」の用語を使わず「赤砂」表現している。
重森三玲は千家家と康國寺の庭で見た赤砂について、多数の著作の中で、次のように記している。

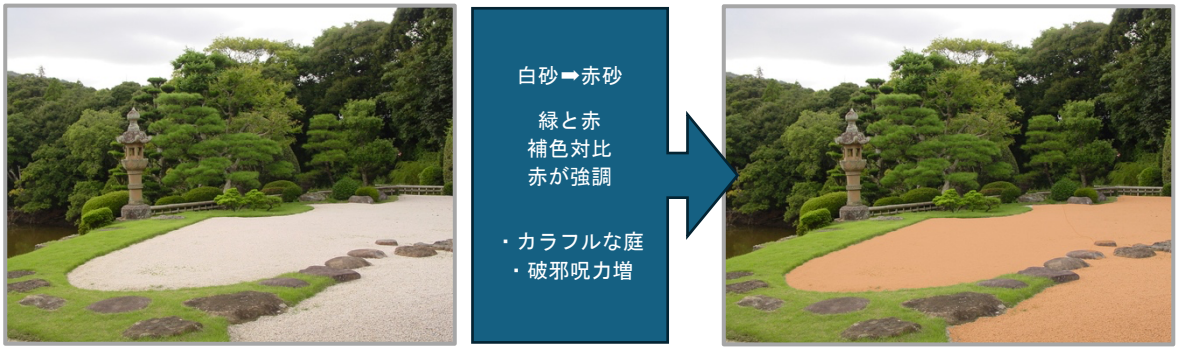
・千家氏庭園

＊地表は飯梨川の御留砂で**暖色を表現**し、如何にもやわらかく優雅な形態である。もともとこの砂は産出量も少なく、しかも路地には更によく適合するから、好んで使用されたものであるが、このあたりにも、出雲の茶趣味がよく主張されているのである。

＊庭の約半分の面積は砂敷とされているのであるが、この砂敷も、この地方独特の**赤砂利**であって、かの松平不昧公が愛好した御留砂である。これがあるがために、景観的には甚だ特色のあるものになっているのである。

・康國寺庭園

＊地表は**赤砂利**で、これはこの地方でよく見られる極めて茶趣味の強い飯梨川の砂利であろう。・・・地表の砂利は、すでに記したように、飯梨川の砂利と考えられる。本庭の美的景観の大きな素因の一つである。



左 現在の康國寺 白砂の庭 ・白砂を赤砂に変換➡ 砂面が広いこともあり、イメージが大きく変わる

重森三玲は、出雲の庭で見た赤砂の庭を自らも作庭したいと考えたと思っている。

重森三玲が作庭した赤砂の庭、代表的な庭に丹波市石像寺の「四神相応の庭 1972 年作庭」や京都市東福寺塔頭龍吟庵（りょうぎあん）の「不離の庭 1964 年作庭」がある。このような赤砂を使っての作庭は、重森以外の作庭家は誰も手がけていない。根拠はなく妄想に近いが、「出雲で赤砂の庭に出会わなければで、重森三玲が赤砂の庭をつくることはなかった。」と思っている。

京都 東福寺塔頭龍吟庵
不離の庭 重森三玲作庭
・作庭当時、鞍馬石の錆砂利を使った。今は、砂利を取り替えたが産地は不明

4 赤砂とは何か

赤色は古くから縁起の良い色、神聖な色として、神社等にも使われる色である。古来、

赤色の材料はベンガラと鉛丹（えんたん）であった。明るい朱色に塗られた日御碕神社や稲荷神社の鳥居などは、鉛丹、丹塗りの色である。ベンガラは鉛丹より彩度が低く、少しくすんだ赤色になる。料理屋などの塗り壁に利用することが多い。

出雲市 日御碕神社
社殿はすべて丹塗り、明るい朱色

鳥取県倉吉市　丸井家住宅　ベンガラ塗の赤壁
茶道の中心となった町家住宅

ベンガラは鉄さび、鉛丹は鉛の錆である。色あせを防ぐため、焼成するなどし、含有酸素を減らし、いつまでも赤色が映えるよう工夫している。

＊鉛丹（Pb304）
・丹塗りの材料, 辰砂
・明るい朱色、神社や稲荷神社の鳥居などを塗る
・材料は、鉛を含む塗料で有害

＊ベンガラ（弁柄）
・酸化第二鉄（Fe_2O_3）赤錆
・やや暗い赤茶色、染料として多用
・岡山県高梁市吹屋で生産

赤茶けた砂「錆砂利」は花崗岩などの岩砕片に酸化第二鉄（Fe_2O_3）の赤錆が砂利の表面に固着したものである。名石「鞍馬石」は鉄分を多く含む花崗岩であり、錆色、赤茶色である。鞍馬石を破砕し砂利とすると同じように錆砂利となる。

出雲地方は、かつて、砂鉄から玉鋼などを生産する「たたら製鉄」が盛んに行われた地域である。この地方の花崗岩は磁鉄鉱系列であり、かんな流しにより採取した黒色の砂鉄を還元し玉鋼などをつくっていた。砂鉄も鉄さびの一種である。砂鉄は、黒色の四酸化三鉄（Fe_3O_4）であるが、錆は安定し進行することはない。岩砕片に黒色は固着することはなく、赤砂はできても黒砂ができることはない。

赤砂が取れなくなったいま、出雲流庭園では、斐伊川水系で採掘した花崗岩の岩砕片を利用する。庭に敷かれた砂が、赤く錆びることなく、いつまでも白さを保っているのは、酸化第二鉄（Fe_2O_3）が少なく、砂鉄である四酸化三鉄（Fe_3O_4）が多いからであると考えている。

田頼川だけはだけで赤砂が採取できるということは、流域のどこかに大量の酸化第二鉄（Fe_2O_3）の埋蔵地がからであると考えている。しかし、このままでは各地にある錆砂利

と同じような赤茶けた砂となる。赤砂はできないのである。

私は田頼川の赤砂の構成物は花崗岩の岩砕片でなく、長石や石英などの鉱物が主体となっているのではないかと思っている。透明感が強い長石や石英に酸化第二鉄(Fe_2O_3)の赤色が彩色されると赤砂となり、くすみのある岩砕片ではくすんだ赤茶色の錆砂利になると考えている。岩石の専門課の知恵を借り、解明していきたい。

5 菅田庵の赤い庭

松江市の菅田庵は、出雲地方で唯一赤砂を利用せず赤い庭がつくられている。「赤白の庭」である。

南側の庭は白砂を敷き詰め、庭石も据えず庭木や石燈籠も少ない、広がりのある庭である。中門をくぐると全く異なる様相の庭が出現する。茶室「菅田庵」の茶庭は、赤土を敷き詰めた全国的にも珍しい赤い庭である。

庭の中門で陰陽を分ける
手前は陽の庭　中門の奥は陰の庭

当主は、中門が陰陽を境をあらわす「陰陽の庭」であると語る。南に広がる白砂の庭は「陽」の庭、こんもりした山に囲まれた赤土の庭は「陰の庭」であるとというのである。

赤土で敷き詰められた陰の庭
茶室の周りには山が迫る

不昧公ゆかりの菅田庵は武士の庭である。農民が作り続けてきた出雲流庭園と作庭手法は異なるが、赤色で邪気を祓うという思いは同じだと考えている。

庭の赤土を観察すると、この地方で産出する一般的な赤土粘土より赤色が顕著である。赤土は酸化第二鉄(Fe_2O_3)の赤錆が固着した粘土である。菅田庵の作庭者は、赤錆の多い赤土を探し当て持ち込んだのか、またはベンガラで赤土を着色したのか、今となってはわからないが、昔の技術者はたいしたものだと感嘆している。

6 未来に続け、赤が映える庭づくり

江戸から明治にかけて出雲の人々は、ことあるごとに六曜などの陰陽五行や縁起担ぎを頼りに暮らしていたと考えている。語呂合わせではあるが、ナンテンを難転と読み、樹霊を信じ、縁起木として正月に飾り付けたのも同じである。

屋敷は、自分たち家族を守る最小単位、邪気を祓い無病息災を祈る砦であることは前にも述べた。しかし、山陰の冬は厳しく寒い。家族が末永く栄えることを願い常緑樹にこだわった庭は、日はあたらず暗く、「陰」の世界、そのものとなってしまった。そこで、庭に赤色を持ち込んだのである。出雲の人々は、赤は火であり、悪霊を退ける色であると信じていたのであろう。

裕福な家では、田頼川の赤い砂を庭に敷き詰めることを夢見て、遠い道のりを人々は荷馬車などを駆使して運び込んだ。江戸末期から明治、激動の時代を生きた人々、自分の力ではどうにもならない苦難を乗り越えるため、赤色の呪力に頼ったと考えている。